

## 【翻訳】

## カント哲学についての手紙

3

—セルジオ・ソルミ宛

アラ  
ン

〔神谷幹夫訳〕

## 第七の手紙——道徳について

〔自己を精神と認識すること。三つの格率。暴君たちへの抵抗。救いについて。老いについて。愛について。〕

カントの道徳的著作は幽微性に満ちている。カントがふたつの『批判』を対称的にとらえようとしたことは明らかである。また、細部は読み手の理解圏内にあるけれども、しかし、精神については同様ではない。カントの道徳的精神はきわめて幽微であり、それがわかつたら、すべてのことが自ずと然りである。我々は『純粹理性批判』によって、そこにまったく自然と到達したのであるから、それを直接示すことができる。道徳は自己を精神と知ることを内容としている。これには絶対的に従わねばならない。なぜなら、高貴さというのは命令するものであるから。道徳のなかには威厳なる感情以外何もない。すべてのことは私が自己自身にたいして、絶対精神にたいして、同胞たち——彼らのなかに私は同じ精神をみとめる——にたいしてもっている敬意から生まれる。また、道徳性とはまさに、我々が先の手紙でやったように、存在にたいし判

(一)

断をあたえることを内容としている。そしてまた、存在が詰まらぬものであり、命令すべきではないと判断することにある。不死性は存在への服従以外の何ものでもない。我々の持統が依存している詰まらぬ諸事物、諸々の状況、すなわち通常我々の運命と呼ばれているものへの服従——。運命というのは、自己を精神と知る（一精神）にとつて、まったく異質なものである。それは、いわゆる神の意志を疑うことである。神は我々自身の存在以外の何ものでもない。心の欲するまま為すことが善なのだ——ただ、意志の意味を知っているならば、だからすべての徳性は、この緊張にある。長い間道德の保持者として有名だったストア主義者たちが言つたように、この小さき暴君たちへの抵抗のなかに——。カントはここでもまた、人間の人格がもつ普遍觀念を発見しているだけである。すなわちしばしば自己自身のうちに深く隠れた意志、そして誤りなき習俗の制定者である意志——。道德的法則は人格の深い意志によつて定められた法則である。それは事物にはまったくかわらない。ただ人格だけにかかわっている。それは三つの公理あるいは格率のよく説明するところである。すなわち汝の行動は汝自身によつて普遍的法則として建てられているようにつねに行動せよ。汝自身においても、他者においても、人間の人格をけつして手段としてではなく目的としてつねに考えよ。汝の行動は「目的の王国」、すなわち「精神」にふさわしい人格の社会における法則とするように。これを適用できないような例はない。何びともこの誠実な人間のドラマを忘れることができない。カントの例は人の心をきわめて強く打つものであるから、それによつて人は、暴君が排除せんとする人間にたいして不正な証言をするのを拒絶する。また、彼はこうしてその幸福を、否、自身のいのちをも危険にさらしていることを知るのである。たしかに誰もそのような人の身になりたいとは思わない。しかしながら、そのような状況に突然投げ込まれる感情は深刻である。我々は、自分自身もまた、暴君に抵抗することができると思う。我々はこの運命に呻いているのである。我々に、いわゆる最大の悪を不可避にもたらす運命——。運命とはそういうものだ！ 誰もがこのような偉大な証拠をもたらすことはできない。殉教者、あるいは証人たちのあかしは、幸いにして稀有なのだ。道德性はこれらの恐るべきあかしの省察を内容としている。そして、それら

(11)

に耐え切る決心を内容としている。誠実な人びとの社会は、そのような感情がすべての人びとのなかに見られることを内容としている。これはこの苦難を避けている人にも確かにできる術である。

時々暴君からまぬがれて、自由と徳の王国を建てようとする意志については、年齢トシの人にふさわしいものである。若い人間にあつては、我々をサタンとして〔陰府カクに〕表象することは墮落した意志を持つことである。このよく知られた考え方はきわめて自然なものである。なぜなら、人は自身の人間性を棄てることのできないならば、自由となれないであろうから。このサタン性〔陰府性〕は、大いなる価値をもつ。人はそれにしばしば出会う。それを許すのが当為そのものである。これは見事に命名された「精神のひらめき」のなかにあらわれている。

したがって、これが道德的世界である。そのようにこの世界は揺れ動いている。時にそれはドラマをなししているのである。当為とはその世界のなかに兄弟と同胞たちだけしか見ないということである。それが友愛である。

自由は、周知のごとく、たとえ尊重されたくないと思つても、それでもまだ尊重されるほど価値のあるものである。道德規則のこの第一の要請を強調しなければならぬ。自由は「合理主義的世界認識コラシブル・ワールド・レコグニッション」のアンチテーゼの一つのなかで、御しごたい、それでいて命令する不思議な存在としてあらわれた。なぜなら、おわかりのように、自由を絶対的に否定するきわめて強靱なアンチテーゼは、与えられた意味領域にとどまりえないからである。一つの存在の諸条件は、どんなものであれ十分なものであるから、原因を持たぬある原因、絶対的な意味で何かを創始する原因を考えねばならない。ある自由な、原初的原因が、どこかに存在すると考えねばならない。ところで、この必然性はまた、我々に不安をあたえるだけである。曖昧な期待をあたえているにすぎない。道德を考へるとき始めて、もしどこにも自由がないならば、道德性もまた、どこにもないのがわかるのである。なぜなら、すべての徳性は、「否ノー」のまったくない暴君のような定言的命を想定しているから。絶対なのだ！ もう一つのものなのだ。私は今、自分には不可能だと思われたもう一つの力に

(四)

圧倒されている。しかしながら、それが必要なのだ。託された奥義を渡してはならない。不正に獲た善を返さねばならない。バルザックは二度、『禁止』と『フィルミアニ夫人』のなかで、この良心の問題をいい表わした。つまりそれは日常のことであり、人生の諸々の出来事のなかにあることをあかししている。絶対！絶対！この繰り返しは誠実な人間の意識のなかで鳴り響いている。彼はそれほど傲慢ではなく、反対に、より寛大であり、ドラマのなかで友情を持っている。これは凡庸な者にとつて慰めである。この社会を理解するようにならなければならない。いつもまったく取るに足らぬ、そして時としてその結果に脅かされている社会を——。私は、そこで、ラニョーのことを思っている。彼は世俗の慈愛から引き出されたすべての帰結を断固として受け容れたのである。また、ジュール・ラシュリエのことを思っている。彼は自己自身においてまったく普遍者であり、朝のミサにおいてまったく静謐であつた。彼は人間存在を怖いとは思わなかつた。人間を影のごとくする不正の陰謀にも恐怖を感じなかつた。すべてのことが人間にあつては不完全なのだ。私は、我々はすべてこの世では異教徒だ、煉獄はここにある、と言つたアウグスティヌスしか知らない。そこで重大な仕事は、できるだけ早くパラダイスに行くことである。だから人はここにとどまろうとしない。人は死を恐れる以上に死を望んでいる。これが本来的意味での宗教である。しかしながら、敬虔は我々に与えられた地位にとどまるように勧める。敬虔はまた、このポストをできるだけ良い、愉しいものと判断するように勧める。樂觀主義は神を信じているという意味で、当為の一部をなしている。悲觀主義は、与えられたこの自由を使用し続けるサタンの精神である。これはひとつの世論である。すなわち偉大な司祭たちの意見である。彼らは他者の諸情念について多くの告白をし、それらを大いに和らげたという意味である。そこから、人類の救いは神にとつてさえも難しいということが結論される。しかし、人びとの重大関心事は、救われるかどうかを知ることではなく、神が勝利するかどうか、この世がまだ幾世紀も存続するかどうかを知ることである。ポシユエはそのように問いを措定した。臣民の救済責任を持つ国王に説明しながら——。

我々よりもまえに亡くなったあの多くの人びとは、もし彼らが救われると言われなかつたならば、反抗す

るであらう。トルクマダは、噂によれば、モリスコから救われるために壮絶に死ぬ機会を奪うことができると思わなかった。この微妙な点は熱狂主義と無関係ではない。要するに、すべての人間はたしかに不完全であると言える。これは道德的意識にとつて本質的な判断である。すべての人間は死を恐れる。取るに足らぬメリットにけりをつけるように——。だからすべての宗教は、人間を裁くのは人間自身である、と言っている。

道德規則の第三の要請、すなわち神の存在は神自身からあらわれている。それは神を現出させている人間たちの悔悟である。不死性については、明らかに人間がそれを、まるで自由を欲するごとく欲しているはずである。神を信じることに、そして不死性を信じることは一つの当為である。したいことをしようとする勇氣を持つのは一つの当為であるから。死を欲しない老人たちのなかには美しいものがある。彼らは同胞たちに勇氣を与える任務を受け容れている。したがって、葬式には何らかの価値があるのだ。そこで参列者は自身自身もまた、この厳正な死者によつて、裁かれているのを感じている。私が論じているのはこの思想の水脈である。というのは、道德はそれになりたいする応答であるから。宗教は反抗者の類しか問題にしていないのである。おわかりのように、服従は生き方に属して、生き方はまた、死に方と同じものである。左翼のものの方では、愛は二人に幸福を与えようとするとき、たしかに美しい。十分信じることは、十分愛することと同じ意味である。そして許すということもまた、同じことである。アルケストはセリメンにたいして正しくない。彼は彼女(セリメン)が完璧であつてほしいと思つている。何というばかげた企てだろうか！ そのことは愛の楽しみの想像だけでも十分あかしされている。この性的愛は、他のなにもものにもまして、眞の慈愛に近い。なぜなら、あえて言えば、それは生をへ全身で抱きしめることであるから。

親愛なる友よ、貴方は言われるであろう。カントはそのような問題をまったく論じなかった、と。でも私は、カントはきつとそのように考えたと言おう。彼の思想がこれらの問題をすべて解決することはまったく疑いがない。またスピノザ自身、宿屋の主人たちからサービス時間の意味を再発見し、これらの平凡な人びとがそのような方法によって救われることに、おそらく心の底では驚嘆していたと言われている。彼は美しき世界に付与された想像力によって言わんとしたのである！ すべてのものが救われるはずである。世界もまた。美は、おわかりのように、世界を、社会を、神々を解体から救う仲保者である。今私の眼には、『第三批判』がそのように映るので、ここで私はこの手紙を終えねばならない。これは手紙というよりも説教であるから。私はカントのなかで「人間」の問題を明確にしたかった。そして「まあまあ」そこに到達したと思う。この言葉は、非力な者にとつて「合格」を意味する言葉である。そう思いませんか。でも私には貴方がどう考えているかわからない。それを考えてみなければならぬ。私にはそれができる。なぜなら、私は貴方の友人であるから。

一九四六年四月四日

### 第八の手紙——判断力について

〔「ヌーメノン」の前で。合目的性について。普遍的心情。偶像崇拜について。わが半神たち。〕

我々は今、人間精神を詳しく記述している。凡庸な精神にはその仕事は終わったように見えるであろう。けれどもカントは凡庸な精神ではない。我々は彼とともに、まったく新しい至難な探求レヴェルに入るのである。なぜなら、すでに指摘したように、カントは「ヌーメノン」の前にいるから。これは対象として考えるものではまったくない。主体としてしか考えることができないのである。これが今、言わねばならないことである。

我々は大きな結果、重大な結果によってしか我々自身の思考を知らない。概念、原理、すべての学知は、一つの絶対的統一をなしているように見える。そしてこの統一は形式的にすぎない、すなわち決して現成しない。この統一は一つのものではありえない。それは魂そのものである。判断力である。それは自由なる存在であつて、決して把握されない、しかもその表徴は到るところにある。世界が始源において綜合一性として現成することは、まだ十分ではない。それはおそらく幻想にすぎない。おそらく主観的なものにすぎない。世界を主観的なものと考えすることは不条理である。いつたい世界とは何か。これは決して問われなかつた問いである。なぜ世界が在るのか。なぜなら、精神はそれ自身によつて在るのだから。世界は精神に應えているのか。精神に、少なくとも毀損したイマジユを示しているのか。世界は表象としてしか知られない、とよく言われている。はたして世界は表象にすぎないのか。我々が知覚するためには直観が必要であるように、同様に我々が判断するためには感情が必要である。表徴とは何か。我々にとつて世界は表徴なのか。

たしかに、世界は我々のうちに感情を覚醒させる。表徴とは何か。我々にとつて世界は表徴なのか。そのとき諸有機体のなかには永遠性が在る。なぜなら、ここでは明らかに、諸部分は全体に依存しているからである。それが諸有機体は互いに目的であり手段であると言つて説明されていることである。このように至難な探求において、学問からまったく排除された合目的性觀念があらわれる。この觀念は排除されたけれども、そのことによつて我々はそれを、これらの顕著なケースでは純粹状態で見出す。そこでは真理を知解する代わりに、我々は美を存在のしるしと判断している。すなわち要するに、外部の精神のしるしである。そのとき精神は世界となる。なぜなら、精神は世界を表象として主張するのみならず、精神が世界であるから。『判断力批判』の始めにある感性論的判断力批判については、本稿の最後に取つておく。眞の主題、すなわち神学的判断力批判は難解かつ重要な部分である。これこそ私をもっとも強調したい部分である。なぜなら、『批判』の細部とともに、カントは美と至高性についてのすばらしい劃期的発見を呈示しているように、私には思われるからである。それは私にとつて報酬であり、窮極的確実性である。『第三批判』に圧倒されな

いようにするためには、そのような順序で探求しなければならぬ、と私は思う。この「批判」の対象はたえず拡大し、その代わりすべての学問、すべての道徳、すべての宗教を包含しているからである。したがって、この「世界」の師——すなわちほとんど神となるような者、そして「本質の偶像」<sup>イデオラ</sup>と化した者——となるのが賢明である。

汎神論<sup>パンテイニスム</sup>はつねに哲学を脅かしてきた。もし世界そのものが、アリストテレスの天才的ヴィジョンによれば「永遠の生き物」であるならば、もしすべてのものが宇宙のなかで合目的であるならば、また存在論的推論を逸脱せざるをえない。存在論的推論は完全性によつて存在を証明しようというものであり、あえて言えば、すべてのものは人間——すなわち考える唯一の存在、自己を高めることによつて道徳性にまで到る唯一の存在——のために有るという主張である。なるほどそれは一つの証明であるが、しかし、これは道徳的人間にとつてしか価値がない。道徳的人間は、道徳性を知解しているから、万物に一つの道徳的価値を認めるのである。しばしばカントは、その思想を大きな謎のほう、人間歴史のほうへ導いている。けれども我々に進歩をもたらすあの普遍的戦いのイマージュの前でたじろぐ。このとき、進歩というのは貶められていないだろうか。カントは問題を指定しながら、自己懷疑に陥らざるをえない。彼はつねに恒久平和の人であつたということである。ジャコバン派のなかに人類はつねにあると判断しているから。ここにはジャン・ジャック・ルソーの影響を見なければならぬ。哲学者(カント)にとつてルソーの影響というのは、たいへん顕著であり、カントはルソーを読み返すことによつて、『批判』にとつて恐れていた情動までも使用したのであつた。ルソーをあまりに愛している人びと——私自身もそれに属しているが——は、ケーニヒスベルグの哲学者の心がここでよくわかるであろう。彼はモラリストの冷酷さのような厳しさを持ちながら、しかし、人間のなかでもっとも優しい人のような柔和さを持つ。そこで彼は、彼を笑つた合目的性という大きな観念と闘わねばならないであろう。したがって、彼は哲学者のなかでもっとも詩人であり、その偉大な後裔たちと均衡している。後裔たちのなかで、ドイツ哲学では、感情の偉大さが思想の厳格さと結合するのが見られたのである。

(八)



シェリング、ヘーゲルはそれを十分にあかししている。そこから私は、神学的判断力批判という一つの誠実な観念を持つのである。解決された問題だ、と人は思った。たしかに、哲学者（カント）にとつては解決された。しかし、『告白録』の人間にとつては未解決である。なぜなら、観想に陥つた人間が問題ではなく、反対に、人間のすべてを歴史のなかに、また思想のすべてを諸宗教のなか、寺院のなかに見出す人間が問題であるから。これはドイツ哲学のテクストである。カントの後の、そして今なお生きている良き時代のテクストである。そこではすべての人が、正しい人間が歴史の目的であると考えている。すべての人が共通感覚を發展させている。そして共通感覚はもはや冷酷な理性ではなく、むしろ普遍的な心情である。なぜなら、そう言つてもいいすぎではないから。それを発見したのが『第三批判』である。それが同胞の闘いを終結させる、と何度も何度も約束し表示された人間の宗教である（宗教はすべてそうである）。親愛なる友よ、カントはまだ我々の前を歩いていることを知るがいい。

要するに『判断力批判』の対象は何なのか。これもまた、我々を容易な推論から逸脱させるものである。つまり単純な感情のなかで、我々に魂や神を示している推論から——この神智学はたしかに尊敬すべきである。しかし、もしそれで宜しとなると、自己自身の思考にたいする敬意はなくなる。我々が知覚することなくその実存在があかしされるような概念は——我々の魂のなかで主観的な概念は——一つもないのだ。だから「ヌーメノン」の感情は、どんなものであれ、不死性あるいは神を我々に知らせるために十分ではない。でもどうして問題なのか、と信者は言う。それこそが、まさに理性の偶像崇拜となつた誤つた宗教である。そのように対象化された概念はすべて、弱き革命家たちの欠点である。彼らは人間の進歩が一つの対象として、一つの物として、それ自身のなかで、それ自身によつて存在していると主張するのである。これこそ偶像崇拜である。反対に、自己の理性にたいする敬意から、人はそれぞれ、進歩はひとりでは生まれないう、進歩は人間のまっただき行動を要請していると判断しなければならぬ。したがつて、問題は神のはたらしを頼ることではない。進歩が世界の一事物であつたならば、そうすることができ得るであろうが——。それ

は信仰を欠くことであり、重大な意味で当為を欠くことである。当為は、第一義的には信じること、すなわち確實でないということである。これは共和主義者の躍動であり、眞の革命家の躍動である。精神しか期待してはならない。精神として我々は、絶対的な意味で我々しか持っていない。したがって、すべてのことが我々にかかつている。平和は我々にかかつている。もし私が精神にたいする当為を欠くならば、平和は失われる。おわかりのように、ここには熱狂主義がある。この同じ熱狂主義はカントの到るところにあり、権力と結び付くことを絶対に許さない。権力は事実としての一状態にすぎないのである。そうすると、この熱狂主義は世界の善き本性と結び付いた静寂主義であろう。はたして物質を信じて自己理解の難解さを呈示がって、それが「批判」の最後の帰結である。それは我々が、我々自身にたいして自己理解の難解さを呈示することである。要するに、何かをする前に、その報酬を待たないことである。この種の省察によつて、哲学は宗教と同じものとなる。否、むしろ俗な宗教のかわりに、眞の宗教を、誤った神々にたいして「眞の神」を建てることができる。そのように我々の思想の純化はなされるのである。「第一批判」のなかで嚴格に開始されたあの純化が——。カントは当為がやさしいとも、救いがやさしいとも考えてはいない。そこにカントの秘義がある。カントは精神を発見した。そしてそれを失うな、と主張している。しかし、もし革命が起こったならば、彼はすべてのことが失われると思つてゐる。なぜなら、起こつたことは物質の均衡にすぎないから。おわかりのように、ここにはジャコバン精神の蘊奥がある。これはカントの眼には、政治的宗教改革のように見える。このような自己の同意にたいする反逆精神——私はそれを、わが半神たち、すなわちラニョーのなか、ジュール・ラシュリエのなかに見出した。しかしながら、私は自己批判にまで突き進むことはできなかった。自己批判——魂自身にたいする大きな懷疑と、途方もない謙遜。ラニョーは、私がしばしば見たかぎりでは、謙遜のあまり怒りを生じた。すべてを拒絶したその大志が、私にそのことを非常によく説明してゐた。怒りからではなく、存在論自身と同じほど明確な推論によつて、拒絶したのである。今私にはラニョーの知恵が、なぜ彼の眼には決して成就していなかつたのかよくわかる。彼がこの感情を十六歳の子

どもたちに伝えたということはまったく奇蹟である。これは、すでに言ったように、我々が世界となった表徴しるしの一つである。

親愛なる哲学者よ、この結論を呈示するのに、私はたいへん努力した。けれども、もし貴方が『第三批判』をよく読み返すならば、私はただ、カントの忍耐と謙遜を、はるか彼方から、模倣したにすぎないことがわかるであろう。新しい感性論は次回の、最後の手紙のために取っておく。カントとともにこの感性論は、十九世紀のすべての文化を、さらには文学まで刷新したのである。これによって政治家たちは、驚異の力をもつ政策理論を生み出したのである。なぜなら、すべての政治活動は、耐えがたい浅薄さを受させることであるから。へつらいと同類の、このような浅薄さは、ついには民衆をはずかしめるであろう。たとえカントの精神が、まさにエピクテトスやマルクス・アウレリウスに匹敵するあの辛辣さ、あの偉大さを有しなくなつたとしても――。

私は貴方の時間を浪費させたことを謝らねばならないだろうか。きつと否である。なぜなら、貴方は目ざめた精神を持つ人であるから。親愛なる友へ、ここを込めて。

一九四六年四月九日

### 第九の手紙——美および至高性について

〔美の四つの契機。至高性のなかに見えるもの。ユピテル。ユダヤ教ないしは真の宗教について。普遍的歴史について。感性論への還帰。〕

カントが『判断力批判』を始めたのはそこからである。それはしかし、始めではなかった、と思われる。カントは楽しかったので、『第一批判』の方法にしたがって二観念を分析したのだ、と私は理解する。新たな主体のなかで諸カテゴリーの秩序にしたがうのは何という楽しみであろう！ 私自身、カントの精神がたい

(一一)

へんよくわかつたように思われるので、私は「美の分析論」にしたがうたびごとに、始めての時と同じように、自分を不思議に感じている。「様相」についてはカントは何を見出すのだろうか、と私は自らに問う。私  
 は一つの新しい思想の到来を感じる。それを予感し、推察しようとする。だが、うまく行かない。「美」の四  
 契機、すなわち四つの定義は、原理的に保証された、しかも思想的にも秩序化された、美と喜びとにかんす  
 る哲学的分析の傑作である。

親愛なる哲学者よ、これらの有名なくだりにについては、私は貴方に何も知らせる必要がない。私はただ、  
 貴方があらゆる主観知とのかかわりで、それをさらによく理解するように促しているだけである。あの有名  
 な定式「美は理屈抜きで気に入られるものだ」からどんなに生き生きとした光が生まれているか、よく見る  
 がいい。すぐにわかるように、美は証明を持たない。美においては理屈は何の役にも立たない。美は直接的  
 であり、物の概念とは無関係である。それによってまず第一に示されることは、証明を持たぬ確実性がある  
 こと。ある音楽が美しいことを証明できるか。できない。でもそれ（音楽）からわかる。明らかに、美のなか  
 には合目的性がある。美は我々のためにつくられている。美は我々にふさわしい。これは美はいかなる目的  
 観念（表象）も持たないけれども、ある合目的性を含んでいる、という第三定義を説明したものである。この  
 注意は我々に前の手紙を想起させる。すなわち問題は合目的性を理解することではなく、それを欲すること  
 である。何びとも精神を信じるように強いられてはいない。精神を信じることができれば十分である。信じ  
 ることは報酬である。我々はここでは精神の奥義に在る。知る楽しみのなかに在る。美はこの知の一つのあ  
 かしである。否、あかしというよりも、一つの例である。ある修道僧が、まったく不信心なその兄弟につい  
 てこう言った。「彼は信じることができない。彼は音楽が好きではない」と。これにたいして、兄弟はあらん  
 かぎりの抗議を企てた。修道僧はあまりにも多くを証明した。すべての修道僧がするように――。しかしな  
 がら、人は美の前では万人の同意が得られるものと判断しているのは確かである。そして第四の契機のなか  
 に見えるものは、美によってあかしされる共通感覚である。人間を自己目的に定義する共通感覚である。

(一一)

たとえば、すべての人は平等であり、同胞であるというような——。したがって、審美眼がないならば、種としての人間も排除されるであろう。このような「人類」のイデーは、発見されるやいなや、人間である兄弟を憎むことも非難することも許さない強靱な感情を生み出す。

至高性によつて我々はまた、一層友愛と結びつく。なぜなら、至高性のなかに見えるものは、物質のはるか彼方にある精神であるから。たとえば、精神の大きさを考えるならば、それは数学的至高性であり、精神の力を考えるならば、それはダイナミックな至高性である。諸力や諸々の卓越性をまったく認めないこのよくな人間の偉大さに注意するやいなや、人は確かに「人間」を再認識する。動物崇拜、すなわち本能のなかにある精神の存在を想定することから出たものが、やがてオリュンポスにおける人間崇拜となつた。すべてのことが真の崇拜を準備していた。人間となつた神の崇拜ではなく、神となつた「人間」の崇拜である。ヘーゲルが含みのあることをばを吐いている。「ユピテルはすでに、まったく人間であつた。ユピテルに欠けていたことは、ただ一つ、彼はまったく神ではなかつたことである」。これはホメロスが、運命に服従したユピテルを我々に示すことによつていい表わしていることである。これがまさに偶像崇拜である。なぜなら、ユピテルを讚美するかぎり、必然的に運命を讚美しなければならぬから。こうして異教は我々を、永遠の人間として表象しようとする大きなヴィジョンを主張することができなかつた。この永遠性はユダヤ教——すなわち真の宗教、もし真の宗教が一つあるとしたら——のなかでさらによく示されるであろう。ヘーゲルによつて見事に定義されたように、美を讚美したこの世と「霊の民」との戦いがある。またヘーゲルは、どんな神の形姿をもつくることを禁じた。ではいつたい、異教の誤りはどこにあるのか。外的フォルムを神格化し、不死なる人間を定義するかわりに、神を不死なる人として定義したこと以外に——。それは至高性である。すなわち「人なる神」を啓示する精神の威厳である。精神の威厳によつて、我々は魂を発見するのである。そこから我々は、人間のみが魂を持つというあの歴史の真理に到るのである。窮極においてデカルトが正しいのである。なぜなら、彼は動物と仲間になることを拒否したのだから。デカルトは動物がまったく考えな

いことを理解したのである。なぜなら、もし動物にほんのわずかの精神を分けあたえようとする、全精神を動物に与えねばならないであろうから。この誤つた崇拜は解消されるどころか増大している。したがって、哲学のすべての目的は、人類の思想をつくり出すことである。もしあるポシユエのような人が、今日普遍的歴史をつくらうとしたならば、彼もまた、人間の合目的性、すなわちすべての人びとの救いを主導観念として考えたであろう。もし力ではその問題は解決されないとしたら、力によって何が解決されるのか。力はそれが有るといっただけで問題を解決するものだ。親愛なる友よ、貴方は歴史のなかに何を見るのか。到るところでの、イタリアにおいてもインドにおいても、人權の勝利以外に——。ウツドロー・ウイルソンが勝者でないとしたら、いったい誰が勝者か。この厳しい論考を一種の檄文として終えようという、ここで示されたこの体質から、貴方は、どうして私を知っていた人がみんな、哲学というのは何か非常に危険なものだと考えるようになるのか、わかるであろう。彼らは間違っていない。しかし根底において、この危険性はスピノザから、そして「霊の民」から生まれている。ユダヤ教の教えはすべての真の回心の始めである、と私はしばしば言った。今もそう思っている。人間しか信じないという、この種のスピノザ的不信仰性は、未来を保証する法則である。これがあの民によって対象化された憎悪の説明である。これはまた同時に、その憎悪の解決である。他の解決はなにもない。なぜなら、もしも人間的なものから、人間種族を排除せざるをえないとしたら、すべてのことが平和のために失われる。

今、心安らかに本稿を終えるために、美の見事な分析を再考し、そこから「感性論」をまったく一新させたいくつかの観念を引き出さねばならない。美の対象がまったく無私のよろこびであること、それはつまり、何びとも美が存在することを、あるいは美が観照者のものとなることを、欲しないという意味である。反対に、美しいということは、純粹に仮象である。すなわち或る意識に立ちあらわれるものである。したがって、本来の意味において、世界の問題、つまり表象されたかぎりでの世界の問題である。これが分析の第一の契機である。第二の契機としてあらわれているものは、美が理屈抜きで気に入られるものだ、という観念で

ある。仮象を美しいと判断するのは、ある理念との比較ではない。美の理念類型など存在しない。美しい対象自身がそれぞれ、絶対モデルである。ある顔のなかで美しいものは、我々がそのイデーを持つているような完全な顔と似ているからではない。否、そういつてよれば、自己自身と似ているからである。つまり、諸部分と全体とのあいだに調和があるという意味にほかならない。したがって、それ自身において美しい対象など存在しない。仮象がそれ自身において美しいのである。すなわち、美しい仮象のリアリテイは誰ともかわりがないのだ。美というのは絶対的現象なのである。ある肖像画が気に入るのはモデルとの比較からではない。肖像画がそれ自身によって似ているからである。肖像画は何かを啓示している。美は啓示である。絵画の各時代はそれぞれ美のモデルを生み出した。しかし誰ひとり、このモデルを模倣することができなかった。同様に、すべての詩人は、他人が模倣することのできない或る詩の制作者である。けれども、「詩」は模倣されるであろう。なぜなら、たしかに師の実例がなければ、何びともあえて詩句などつくらなかつたであろうから。啓示はしたがって、シェリングが言ったように、一度だけ、あらわれる。それは、啓示されたものは永遠である、という意味である。そのあと、第三の契機が美の逆説を強調する。すなわち美はある合目的性を含んでいる、しかしながら、いかなる目的観念〔表象〕をも持たない。美は我々を楽しませるために創られた。けれども、注意しなければならぬことは、気に入られたいというほんのわずかな符牒しごによって美は無くなる。そこから、気に入られたいという飾りは無益である。そのかわり何ひとつ欲しない、何ひとつ語らない「間」の美がある。下絵のなかに集められた面以上に美しいもの何もない。音楽のなかの沈黙以上に美しいものは何もない。建築において、まったく裸の壁が裝飾された壁以上に美しいのがわかる。詩のなかで、人の待つもの、欲しているものは、決して語られない。自分に気に入る、すべてを枚挙しようとする詩人は、凡庸ならざるをえない。第四の契機としてあらわれるのは、普遍的かつ必然的同意という偉大な觀念である。美はすべての人の気に入ることが必要である。そこから、「三批判」の本質的觀念にもどる。そのなかでは理性との混同を避けるために共通感覚と命名されている。なぜなら理性もまた、すべての人びとに

共通のものであり、自己を互いに同じものとして発見しているから。しかし、感覚は彼らのなかで、よりすぐれた何かを啓示している。それは友愛である。理屈抜きの相似性である。なぜというに、美は証明を持たないから。相似性というのは、事実的なもの、構造的なものである。だから人間は到るところで「人間」を再認識する。最初、曖昧な要素のなか、愚かな部分で——。そのことによつて至高性は無くなるものではない。反対に、それは至高性を基礎づけている。なぜなら、至高性は感情であり、その根底にはある種の怒りがあるから。ことに強調すべきことは、至高性を感じている者は、ほめたたえられることにも模倣されることにも、無頓着なことである。彼はショックを感じていることさえも好きにならうとしている。演説家のなかによくあらわれているように——。演説家は話しているかぎり、咆哮している。彼はことばのメカニツクな要素、動物的要素を示している。人間であるということは、確かにただどしく話すことでもある。私が正しく語る人、正しく読む人びとのなかに見たごとく——。あまりに上手になる必要はない。息を聞く必要がある。リアルな物音を聞く必要がある。物音がなければ美しい音楽がないように、叫び声がなければ偉大な演説家もない。リストは、聞くところによれば、間違つたピアノほど心打たれたものはなかつた。また、すべてのピアノは偽なるものである。調和は、正しく理解するならば、混乱した物音にすぎないだろう。時として、演奏者がそのことを示してくれる。不協和音と言われている摩擦音は、けつして隠すべきではない。反対に、彼は聴衆にいら立ちを与えて、このいら立ちを支配するように導くべきである。よく注意するがいい。このいら立ちは、またもどつてくる、そして拍手喝采に含まれるであろう。この勝ち誇つたような轟音を拒否しようとする人たちは、そのとき音楽に何か欠けていたことをはつきり見たのである。

親愛なる友よ、私はこれらの「幻」が好きだ。なぜなら、『第三批判』の豊饒さを、そしてそこから引き出される諸発展、およびシェリングやヘーゲルのなかに必ずあつた発展を、うまく言い表わしているからである。すべての形而上学にはある種の不可能性が内在していると云わざるをえない。それは我々の思考のざわめきである。それが「世界」なのだ。我々に付きしたがつて、我々に無謀な行動をさせる世界——。この意



味においては、人間は単純に称讃さるべきものではない。もしカントが生きていることを私が知っていたら、私は敢えてこのような手紙を書かないであろう。

この手紙を書き続けようと思つて、前に書いたことを読み返した。そして私が、幾度となく、私自身にとらわれていたことに気が付いた。またこの手紙の続きが——もし私が「美」や「至高性」の批判のなかに含まれた諸観念を正しく分析するならば——この続きが、二十巻ほどにもなることに気が付いた。私にはそんなにたくさんの手紙を貴方に差し出すつもりはまったくくない。私は上記で最後のことばのようなものを見つけたから、ただ結語を記すだけでよかつた。貴方に呈示した論点は、貴方に他の論点を示唆するのに十分であるから。親愛なる友よ、私が貴方に書きたかつたのは以上のことである。膨大な仕事を与えながら、今、心を込めて、貴方に。ご平安を。

一九四六年四月十八日      ル・ヴェジネにて

(終わり)

(訳者註) 解題に代えて、アラン学会会長 ジョルジュ・パスカルの「アランとカント」(LA PENSÉE LIBRE, 1947)を訳出しておく。

\* \* \*

一年前、アランは『カント哲学についての手紙——セルジオ・ソルミ宛』(Lettres a Sergio Solmi sur la philosophie de Kant, Hartmann, 1946)を書いた。彼は冒頭から、こう主張している。いつも「カントを」けつして反駁することなく示そう」(八頁)と考えた、と。この短い文は、アランが四十年ほど前に書いた「スピノザ」の序文の結論に応えたものであった。すなわち

すべての思考体系にはその体系が真のものとして、完全なものとして理解されるような視座がある。我々の試みは、スピノザがどんな意味で正しいかを読者にわかっていたかどうかとするものである。ス

(一七)

ピノザがどんな意味で間違っているかを示すことは、もつと巧みな方々におまかせしよう。そういう方は必ずいるだろうから。(八、九頁)

実際のところ、書いた人を信頼することはアランのいつも取っている思考方法であった。だから彼が哲学者あるいは作家を語るときには、必ず人はその哲学者あるいは作家を読みたくなり、好きになるのであった。彼によれば、哲學的方法は、

「自分の命を救つてくれると思われるようなある負傷者を見出すまで、誰も彼もやつつけること」(八、九頁)ではない。反駁は哲學ではない。反対に、眞の哲學者は理解しようとする者、すなわち反駁しようとはしない者である。アランが好んでそう言つたように、反駁することは、拒否することである。拒否することは、他者を自己から、そして自己を他者から斥けることである。それは架け橋を切斷し孤立して、そうして「獨創性」に到達することである。「獨創性」ということばの通常の用法は、それが狂氣と近いものであることをよく示している。獨創的思想よりも、アランは人間的思想を好んだ。眞の思想家は架け橋を投ずる者であつて、架け橋を切斷する者ではない。カントはこのような人であつた。

「ある日、靴直しの判断を見て、誠実な人間とは何かを知ろうとしたあの地質学の教授」(「わが思索のあと」三七頁)。

ベルクソンは、カント哲學をほとんど一新されたプラトン主義にすぎない(「カント哲學についての手紙」七頁)と非難した。アランは反対に、それゆゑにカントをたたえている。アランがプラトンと同じように、カントを好んだ点は、まさに人間の思想にたいする次のような視座である。

「カントは我々に万人の思想をもたらしている。彼はソクラテスのように、面前の我々を不安にさせて、『さあ、今度は貴方が答える番だ』と言っている。」(八頁)

プラトンやカントの主張は、我々に強いるようなことはしない。彼らはただ我々に、我々自身を認識させるような人間の記述を呈示しているだけである。ソクラテスは彼を聞き、彼に答える者に語り続けている。

私はこうですよ、貴方はほんとうにそうではないのですか、と。そこから有名な格率「汝自身を知れ」が生まれている。すべての哲学的省察がそこに帰する。すべての人が、少し深く省察しはじめるやいなや、自分のなかに、モンテーニュのことばによれば、人間条件のすべてのかたちを有していることに気付く。特異性は仮象にすぎないのだ。それは場所や、時代や、社会形態の差異によって説明されるのである。このことは、ある意味では社会学的・心理学的研究によってあかしされることである。しかし、それは本質的なことではない。人間の本質は哲学者が諸々の出来事を抽象しながら、発見することである。だからこそ、カント主義はほとんど一新されたプラトン主義にほかならないのである。なぜなら、人間の根底はプラトン時代にあつたと同じように、カント時代にあつたからである。それはまた、今日も同様である。

だから、カント自身、プラトンの主題にもどるようにすすめているのがよくわかる。カントは、たとえば『国家篇』についてこう書いている。

「この思想にもつとかかわるのがいいであろう。そして（この優れた男が我々に何の助けも出していないところでは）この思想を明確に示すために新たな努力をするほうがいいであろう。この思想を實踐することができないという、まことに哀れな、腹立たしい口実のもとに、この思想を無益なものとして放棄するよりも——」（『純粹理性批判』 trad. BARNI, Flammarión, I, p. 313）

すべての本物の思想は、従うほうがいい。人は他者の思想にしたがうことから始めて、自分の思想を形成するのである。繰り返すけれども、重要なことは新しい思想を持つことではない。正しく考えることである。講義要項のなかで、カントはこう記した。

「諸君が学校へ行かねばならないのは、学校で思想を学ぶためではない。考えることを、そして自己を正しく導くことを知るためである。」

こうして人は、読み方や書き方を学ぶように、正しく考えることを知るのである。ただこれは、ほんの少し困難ではあるが——。それはいつも人間であることを知ることである。一般の哲学者たち、ことにプラト

(二〇)

ンやカントは、人類の師と理解すべきである。アランは彼らをそのように理解している。だから彼は、セルジオ・ソルミに『カントについての手紙』を書いたのである。ソルミに、こう言いながら――  
「私は貴方がこの哲学者をあまりに読まなさすぎると思ったからではない。でも貴方がカントを十分に読んだとは思わない。それに誰もカントを十分には読んでいないと思う。」(七頁)